A MANIFESTO AGAINST THE PUBLISHING SYSTEM

FERDINANDO FREGA

出版システムに抗するマニフェスト

Roots & Memoryシリーズ第8巻。絶え間なく、仲介なしに生み出される書くものを、出版システムがなぜ収めきれないのか——そして作家が許可を求めるのをやめたとき何が残るのかを、四部構成で描く文学的マニフェスト。

奥付

Ferdinando Frega — Nando the Scribe — The Fifth Blade

行動コード（Behavioral Code）の物語の開拓者。たったひとつの考えを軸に、1ドルの出版エコシステムを築いた。金融が抱えているのは金の問題ではない。行動の問題である。

ONEDOLLAR-STORIESエコシステムの中で編集・監修。デジタル・アーキテクチャ：NAPLES-POST · NOASPECTTIME · ONEDOLLAR-STORIES。初版2026年。デジタルでの読書に最適化された、簡潔でモダンな組版。米国にて刊行。

著作権表示

© 2026 Ferdinando Frega / Frega Editore. CC BY-NC-ND 4.0 ライセンスのもとで公開。

敷居

入る者へ

この敷居を越えることは、システムの言語を後にすることを意味する。ここでは何ひとつ、理解されることを求めない。求めるのは、認められることだけだ。あなたが入るのは一冊

の本ではない。ひとつの状態である。中で出会うものは、許可も、仲介も、承認も待たない。ここから先、あなたは自分が認めたものに責任を負う。

文学的マニフェスト

この本はなぜ存在するのか

このマニフェストが存在するのは、出版システムが作家について語り続けながら、作家をどう扱えばよいのかを知らないからだ。システムは作家に名を与え、選び、手を入れ、流通させる。だが理解することはできない。悪意からではない。構造的な不適合からである。

作家は職業上の役割ではない。市場の機能でもない。最適化されるべき変数でもない。作家は、ひとつの状態の中に存在している。

システムはひとつの状態に出会うと、それを正常化しようとする。それに失敗すると、「狂気」「未熟」「力不足」「方向性の欠如」と呼ぶ。このマニフェストは、婉曲表現を使うのをやめるために生まれた。

これは作家の弁護ではない。技術的な観察である。出版システムは、本物の書くことを絶え間なく生み出すものを受け入れるようには設計されていない。

この本は改革を求めない。ひとつの限界を浮き彫りにする。そして出口を示す。

編集ノート

プロジェクトの範囲

これはシリーズ5作目にして最後のポスターである。新しいテーマは持ち込まない。閉じる。

これはエッセイではない。パンフレットでもない。文化批評でもない。境界を定める行為である。

想定読者は一般の読者ではない。出版界のすべてである。出版社、エージェント、編集者、翻訳者、コンサルタント、プラットフォーム、流通業者、指導者、選考者、そして人間と自動化されたアルゴリズム。誰ひとり除外されない。誰ひとり責任を問われない。

本書は、実務的な解決策も、代替モデルも、ベストプラクティスも提案しない。すでに越えてしまった、後戻りのできない地点を描写する。

献辞

私的な公文書

許可を求めずに書くものを生み出す人々へ。自分を説明するのをやめた人々へ。継続は傲慢ではなく生き延びることだと理解した人々へ。

裏表紙

認知の摩擦

この本は出版システムを良くはしない。「新しい作家の発掘」を助けもしない。市場をより公正にもしない。

役目はひとつだけだ。作家は解決すべき問題ではなく、システムが収めきれない変数であることを、はっきりさせること。

自分の姿を見出した者は、何もする必要はない。攻撃されたと感じた者は、すでに理解している。

序文

先立つ声

このマニフェストが行き過ぎだと思えるなら、それは誇張しているからではない。普段は言葉の下に隠されているものを描いているからだ。

このテキストは論じない。差し引く。物語を差し引く。正当化を差し引く。ロマンを差し引く。

残るのは命題ではない。事実である。

前提

最低限の方向づけ

このマニフェストは、正統性を求めなかった一冊の本から生まれた。『*Author Inside Madness*』は個人的な記録ではなく、それを管理すると称するシステムとは相容れない、ひとつの生産的な状態の記述である。ここではその状態が主体から切り離され、構造的な現象として読めるものにされている。

同意する必要はない。ただ正直であればいい。

著者ノート

責任の引き受け

このテキストは誰も代表しない。いかなるカテゴリーの代弁もしない。合意を求めない。読者は自分が理解したものをどう扱うかに責任を負う、という前提で書かれている。

この先に続くものは、何ひとつ安心させるためのものではない。

序論

テキストの前の最後の一歩

出版は危機にあるのではない。認知的に損なわれているのだ。このマニフェストはそれを立て直そうとはしない。それを超えていく。

構成

内部の建築

テキストは段階的な四つのブロックに分かれている。ブロックごとに解釈の余地は狭まっていく。感情の高まりはない。あるのは圧縮である。

プロローグ

最初の一撃

作家はシステムに入らない。システムが作家に入ろうとする。そしてここで失敗する。

第一部 — 宣言

宛先

このマニフェストは出版界のすべての人に宛てられている。例外はない。序列もない。決める者、ふるい分ける者、手を入れる者、流通させる者、評価する者、翻訳する者、指導する者、測る者、収益化する者に向けられている。自らを「独立系」「オルタナティブ」「傍流」「最前線」と称する者にも向けられている。

作家に向けたものではない。読者に向けたものでもない。作家は説得される必要がない。読者は導かれる必要がない。このテキストが語りかけるのは、管理する者たちである。

除外される者

慰めを求める者は宛先ではない。自分が正しいと感じたい者は宛先ではない。手早い解決策を求める者は宛先ではない。役割と機能を混同する者は宛先ではない。

このマニフェストは対話しない。交渉しない。仲介しない。この先に続くものに「穏やかな」版はない。あるのは読める版だけだ。

技術的な序説

出版システムは悪ではない。無能ですらない。自らに対して一貫している。選び、標準化し、リスクを減らし、行動を予測し、うまくいくモデルを再生産するように設計されている。

問題は、モデル化できないものに出会ったときに生じる。本物の作家は型に収まらない。反抗によってではない。本性によってである。

作家は人物像ではない

作家は職業でも、役割でも、道のりの一段階でも、未来の約束でもない。ひとつの生産的な状態である。許可される前に生み出す。反応がなくても生み出し続ける。承認を待つために立ち止まることはない。

この状態は、待機、選考、承認、スケジュールに基づくあらゆるシステムと相容れない。システムはそれを認識しない。解釈する。

根源的な誤り

出版の最初の誤りは意味論にある。システムは、すでに正常化されたものを「作家」と呼ぶ。まだ管理できるものを「才能」と呼ぶ。収めきれないものを「狂気」と呼ぶ。

それはイデオロギー上の選択ではない。構造的な反射である。ある要素が枠に収まらないとき、枠は問われない。要素のほうが病理化される。

正常化

編集は中立的な道具ではない。選考は文化的な行為ではない。流通はサービスではない。それらは正常化の装置である。読めるようにし、売れるようにし、繰り返せるようにすることが目的なら、完璧に機能する。

許可を求めず、収まらず、速度を落とさず、正当化しようのない書くものに出会うと、それらは機能しなくなる。そのときシステムは修正しない。追放する。

静かな追放

追放ははっきりした拒絶によっては起こらない。沈黙、先送り、助言、勧められる道筋、未来の約束によって起こる。礼儀正しい追放である。合理的で、正当化された追放である。

それを受ける者は、しばしばそれに気づかない。「まだ準備ができていない」と思い込む。すでに外にいるのに。

道のりという神話

出版への道のりなど存在しない。存在するのは遡及的な物語である。ある事例がすでに成功した後で、それを再現可能にするために組み立てられる。

本物の作家で、その道のりをたどった者はいない。道のりのほうが、後から彼の周りに描かれるのだ。早くからそれをたどろうとする者は、依存するよう訓練される。

継続への恐れ

出版システムが恐れているのは作家ではない。継続である。一冊の本なら管理できる。絶え間ない生産はそうはいかない。継続はスケジュールを壊し、戦略を無効にし、選考を無意味にする。だからこそ、くじかれる。薄められる。断ち切られる。

絶え間なく書き続ける作家は価値ではない。システム上のリスクである。

結び

このマニフェストは単純な観察から始まる。出版システムが危機にあるのは、作家を見つけられないからではない。本当に存在する作家をどう扱えばよいのかわからないからだ。

この先に続くものはすべて提案ではない。帰結である。

第二部 — 解体

作家の「発掘」

出版は作家を発掘すると主張する。それは事実ではない。作家は発掘されない。すでに読めるもの、すでに縮減できるもの、すでに見せられるものになったときに、捕捉されるのだ。すぐに解読できないものは探求されない。避けられる。発掘には、収益化できない時間が必要になる。システムにはそれがない。

アリバイとしてのフィルター

フィルターは品質の保証として示される。実際には適合性の障壁である。最良のものを選ぶのではない。内部の均衡を乱さないものを選ぶのだ。フィルターは「このテキストは必要か？」とは問わない。「このテキストは問題を起こすか？」と問う。答えがイエスなら、テキストは通らない。

仲介者としての編集者

編集者はテキストの守り手ではない。システムの仲介者である。本当の任務は書かれたものを良くすることではなく、より予測可能に、より整合的に、より内部で弁護しやすくすることだ。テキストが抵抗すると、編集者は押し通さない。不適合を報告する。決定はすでに下されている。

ケアという神話

「私たちは作家を大切にしている」は、最もよく口にされ、最も実践されない言葉のひとつである。ケアが存在するのは、作家が少ししか生み出さず、待ち、感謝しているあいだ

だけだ。作家が加速すると、ケアは損害管理に変わる。決して速度を落とさない作家は、ケアできない。

キャリアの構築

キャリアとは秩序づけのための虚構である。生産を遅らせ、成果を細切れにし、物語の主導権を保つために使われる。生み出しすぎる作家は「積み上げていない」と責められる。手の内から滑り出ていくのだ。キャリアは作家を守らない。作家のペースからシステムを守る。

未来という約束

未来は最も効果的な封じ込めの道具である。「今ではない」「後で」「次の本で」「時が来たら」。未来は現在を無力化し、切迫感を消し、対立を宙づりにするために使われる。未来を受け入れる作家は、現在を手放す。

幻想としての流通

流通はアクセスとして示される。実際には条件付きの可視性である。テキストは読者に届かない。障害物とアルゴリズムと優先順位のあいだで立ち往生する。流通は増幅しない。薄める。絶え間なく続くテキストは、それを認識しないショーケースに合わせられるたびに力を失う。

正当化としての市場

市場は決めない。持ち出されるのだ。責任を負わずに議論を打ち切るために役立つ。「市場はまだ準備ができていない」とは、「システムは身をさらしたくない」という意味である。市場は原稿を読まない。見ることを許されたものを読む。

救いとしてのプラットフォーム

プラットフォームはオルタナティブだと語られる。そうではない。別の言語を持つ自動化されたフィルターである。テキストを読まない。行動を測る。粘り強い作家は報われない。吸収されるか、見えなくされる。

結び

出版が行うと主張するすべては、ただひとつの機能に仕えている。管理できないものに出会ったときに、時間を稼ぐことだ。問題は倫理的なものではない。構造的なものである。今やシステムは完全にさらけ出されている。

第三部 — 内なる作家

事例ではなく、状態

*Author Inside Madness*は個人を描いていない。作動の条件を描いている。個人的な物語ではない。語られたトラウマではない。告白ではない。書くことが選択ではなく構造的な必然であるときに何が起こるのかを示す地図である。システムはそれを読むことができない。必然を認識しないからだ。

状態としての書くこと

本物の作家は「書く」のではない。常に書いている。テキストに出たり入ったりしない。ふさわしい瞬間を待たない。好機を見計らわない。書くことは断続的な行為ではない。絶え間ない状態である。システムは出来事によって動く。作家は持続によって動く。不適合はここで生じる。

防衛のラベルとしての狂気

システムは理解できないとき、ラベルを貼る。「過剰」「強迫」「距離の欠如」「持続不可能」。狂気は臨床診断ではない。安全のための名前である。速度を落とさせることも説明することもできないものから、システムを守るために役立つ。

許可なき生産

本物の作家は、誰かに頼まれる前に生み出す。契約も、発売の時期も、確認も、戦略も待たない。生み出さないことが不可能だから生み出す。この生産は誤りとみなされる。実際には内的な一貫性である。システムは待つことに報いる。切迫を罰する。

機能的な孤立

作家の孤立はロマンティックなものではない。機能的なものである。継続を保ち、リズムを守り、干渉を避けるために使われる。システムは孤立を人間関係の欠陥と解釈する。実際には生産の衛生である。

脅威としての継続

継続は出版上の美徳ではない。作動上の脅威である。決して止まらない作家は指標を無効にし、選考を無意味にし、刊行という概念を空っぽにする。システムには休止が必要だ。絶え間なく書く作家には必要ない。だから彼は止まるよう促される。あるいは消えるよう。

予期せぬ読者

本物の読者は、出版戦略が想定する読者ではない。安心も、帰属も、導きも求めていない。共鳴を求めている。システムはターゲットを作る。作家は個人と出会う。だからシステム

は、テキストが自由に流通したときに何が起こるのかを予測できない。

政治的行為としての翻訳

翻訳することは適応させることではない。ひとつの状態を、ある言語から別の言語へと移すことだ。システムは市場を広げるために翻訳する。作家は継続を保つために翻訳する。言語がひとつ増えるたびに、管理は弱まる。だから大量の翻訳は行き過ぎとみなされる。

唯一の言語としての成果

作家は説明しない。生み出す。システムは文脈を、インタビューを、経歴を、意図を求める。作家は成果で応える。それは傲慢と解釈される。実際には精確さである。テキストは嘘をつかない唯一の言語である。

結び

作家はシステムと対立しているのではない。尺度の外にいるのだ。優れているからではない。別の軸の上で動いているからだ。システムはそれを直せない。無視するか、縮減しようとすることしかできない。残る一歩は、あとひとつ。

第四部 — 最終幕

危機ではなく、敷居

出版は危機を通過しているのではない。後戻りのできない敷居を越えてしまったのだ。この敷居の向こうでは、選考は機能せず、仲介は遅れ、正統性は意味を失う。システムは、敷居など越えていないかのように動き続けている。このマニフェストは、それに名前を与えるためにある。

作家は戻ってこない

書き続ける作家は赦しを求めない。誇り高いからではない。そうする理由がないからだ。すでに生み出している。すでに流通している。すでに読まれている。システムはもはや必ず通らねばならない段階ではない。数ある選択肢のひとつである。そして選択肢は服従を生まない。

仲介の終わり

生産が直接のものになると、仲介は雑音になる。戦われるのではない。無視されるのだ。これこそシステムが受け入れがたい点である。攻撃されているのではない。迂回されているのだ。

改革は不可能

本物の作家を収めきれる出版改革は存在しない。規制しよう、統合しよう、寄り添おうとするあらゆる試みは遅れてやって来る。構造はすでに現象の速さに追い越されている。

読者はすでに選んだ

読者は許可を待たない。共鳴するものについていく。出版されたもの、自費出版されたもの、流通しているもの、独立系のものを区別しない。区別するのは、生きているものと死んでいるものだけだ。残りは官僚主義である。

応答としての沈黙

システムは沈黙で応えるだろう。それが最後の防御だ。否定しない。反論しない。向き合わない。何も起きていないかのように続けるだろう。だが沈黙は生産を止めない。それを後戻りできないものにする。

これは戦争ではない

対立はない。反乱はない。敵はいない。あるのは決定的なずれである。システムは自らの形を守る。作家は自らの必然に従う。共通の地盤はない。

退出の手引き

これは操作の手引きではない。認知の手引きである。作家は管理できないこと、継続は修正できないこと、管理はすでに失われていることを認めよ。受け入れるか、ふりを続けるか。どちらの選択にも代償がある。

残るもの

出版に残された選択肢はひとつだけだ。作家について語るのをやめ、介入せずに観察し始めること。取り戻すためではない。これ以上の損害を避けるためだ。このマニフェストは加入を求めない。明晰さを求める。

結び

作家は存在するために出版を必要としない。出版は自らを正当化するために作家を必要とする。この本は議論を締めくくるのではない。議論を無意味にする。理解すべき者は、すでに理解している。

軸外の部 — 露出

私はオルタナティブを築いているのではない

私がしていることは、出版のオルタナティブ・モデルではない。プラットフォームではない。ポジショニング戦略ではない。「もっとうまくやれる」と証明しようとしているのではな

い。なしでやれると証明しているのだ。アクセスを求めずに。承認を待たずに。ペースを交渉せずに。これは誰かに対抗するプロジェクトではない。無関心なプロジェクトである。

生産は挑発ではない

量は挑戦ではない。継続はメッセージではない。速さは力の誇示ではない。消えることのない状態の、直接の帰結である。私は場所を占めるために生み出すのではない。止まれば過程が歪むから生み出す。数字を見せびらかしと読む者は、ここでは通用しないカテゴリーを使っている。

価格はフィルターであり、レンズではない

価格は利益を上げるために設定されているのではない。嘘をつかないために設定されている。ステータスを生むほど高くはない。騒ぎを起こすほど安くもない。役目はひとつだけだ。衝動的な消費によってではなく、認めることによって入ってくる者を選ぶこと。ここでお金は価値を測らない。意識的な注意を測る。

私が求める承認

私は賛同を求めていない。保護を求めていない。代表されることを求めていない。私が求める承認は技術的なものだ。絶え間ない生産者として、規格外の作家として、一貫したシステムとして、同化できない現象として見られること。私は含まれたいのではない。相容れないものとして認められたいのだ。重要なのはこの承認だけである。

なぜすべてをさらすのか

すべてをさらすことは道徳的な透明性ではない。構造的な選択である。量を、リズムを、反復を、一貫性を目に見えるものにする。システムの最後の武器、曖昧さを取り除くために役立つ。ここには解釈すべきものは何もない。ただ観察すればいい。

私はコミュニティを築いているのではない

私は聴衆を求めていない。支持者を求めていない。どこかに属することを求めていない。読む者は、ひとりで読む。入る者は、呼ばれずに入る。コミュニティは封じ込めの道具である。私が取り組んでいるのは個々の軌跡だ。それがこの現象を管理不能にする。そしてそれは意図的である。

言語の使い方

言語を増やすことは市場の拡大ではない。意図的に管理を手放すことである。言語のひとつひとつが仲介を崩す。翻訳のひとつひとつが中央の権威を揺るがす。自立した版のひとつひとつが序列を弱める。私が求めているのは文化的な一貫性ではない。構造的な持続である。

なぜ私は止まらないのか

私が止まらないのは、止まることが外の時間に合わせることを意味するからだ。私の時間は過程の内側にある。交渉できない。同期させられない。そのことが、あらゆる管理の試みを自動的に無効にする。

ここが承認の地点である

この業界にいる者は、今や理解している。これは内容の問題ではない。完全な自律、仲介なき生産、正統性なき承認、シ

ステムの外での出版上の存在の問題なのだ。これはモデルとして再現できるものではない。事実として読めるものである。

本当の結び

私は場所を求めていない。予期せぬ場所を占めているのだ。出版に携わる者はそれを無視できる。矮小化できる。異常としてしまい込むこともできる。だが、見なかったふりはもうできない。この本は終わりではない。ひとつの承認である。

結び

以上で、ひとつの立場が締めくくられる。それは作家を紹介するものではない。賛同も解釈も求めない。ただ空間の境界を定めるためにある。

ここから先、命題も提案も示されない。議論は開かれない。何も始まらない。

この先に続くものは、マニフェストを説明しない。補完しない。正当化しない。それはひとつの存在である。それ以外の何ものでもない。

Ferdinando Frega